

# 環・太田川

2001年9月 垂穂号



## 目次

小林一彦のあしたはどっちだ?! .....	2
ついになあだまで、わしらの川の源は、 ふかあーふかあーブナの深山じゃったんで .....	

4インタビューシリーズ

100%クリーン こちら夢中力発電所 .....	
8	
太田川の魚 .....	10
絵画・写真で蘇る太田川 .....	11
投稿コーナー .....	12
「環・太田川」ホームページより.....	13
いっしょにやります専科 .....	14
環KAN学GAKU .....	16
オヤ?ニラミ .....	19
みずへの図書館・インフォメーション .....	20

### 『太田川の船大工』

1975年8月5日撮影

川口九一さん（1895年生まれ）左

川口 悟さん（1932年生まれ）右

・・・説明は20頁



スクールの中、那覇港から東シナ海へ漕ぎ出すブラリスト小林。海図とコンパスが頼りとなる、文字どおり見渡す限りの大海原に初めはビビってしまった。でも気分は「アラビアのロレンス」。

「思いつきでものを言ったり行動したりするんじゃない！」とは、読者諸兄も言ったり言われたりした経験がありがたろつ。浅はかな行動をたしなめる意味で使われるが、でも俺は職業上この「思いつき」つまりインスピレーションを物凄く大事にしている。広告の仕事をしていても、データに基づいて何日も考えまくって辿り着いたアイデアを惜し気もなく捨て、たった今思い浮かんだヒラメキを優先することもしばしばだ。うまく説明出来ないけど、そんなある種、非科学的&突発的な心のうずきみたいなフリーリングに全幅の信頼をおいている今日この頃。これに従うと事がすんなり運んだりするからますます不思議なんだ。

たとえば最近もこんなことがあった。今年の5月頃、ふいに「沖縄に行かねば」という気分が出し抜けに沸き上がってきたのだ。もちろん脈略なんてあるわけがない。次に俺は、じゃあ、沖縄に行つてナニをしたいのか、自分自身に問うてみた。自分自身に問いかけるなんて、考えてみればおかしなハナシではあるが、まず最初にインスピレーションがやってきたのだから順番としてはこれでいいのである。そしてしばらくして脳裏に、シーカヤックに乗って、沖縄の紺碧の海をニコヤカな表情を浮かべつつ漕いでいる俺の姿がうすばんやりイメージできた。ああ、これはいい、気持ちよさそつだ。いつも俺は瀬戸内海でシーカヤックに乗っているけど、沖縄のケラマ列島あたりを何日間かけてじっくり気ままな旅をするつちゅうのはさぞかしハッピーではないかな。無人島にテントを張り、珊瑚の海で泳ぎ、沈む夕陽を眺めつつオリオンビールをグビグビ、プハッ。陽が沈めば、天体を覆い尽くすほどの生ブラネタリウム。それから俺はミュージシャンでもあるから、ウクレレかなにか楽器を持っていつて潮騒とセッションするのもいい。チャンプルー料理も食いたいゾ！そんな具合に堰を切ったようにイメージが次々と溢れ出してきた。そうか、俺は沖縄に呼ばれているんだ。

そこで、ここから重要なんだけど、俺はその願望があたかも実現したかのよう

# 導かれて、 沖縄。

ブラリスト小林一彦の

あしたはどっちなぞ!



【小林一彦】1962年広島生まれ。崇徳高等学校卒。幼稚園時代に登園拒否。小学校時代は、学校・児童相談所・精神科(笑)を行ったり来たり。中学ではイジメを受けるが、格闘技を学ぶことで克服。現在、コピーライター・シンガー・FMのDJ(ひろしまPステーション76.6MHz)・コラムニスト・シーカヤッカー・バイカー・武道家などの多芸と、生来の放浪癖を相称して“風来離師(ブラリスト)”と名乗っている。全国版フリーペーパー「B.B.B/ブラリスト小林一彦の屈折流れ旅」など、レギュラー連載コラム多数。

に、それぞれの光景をできるだけありありと脳ミソのイメージスクリーンに強くスキマニングしてみた。(なにせ去年の正月、まったく出し抜けに「FMのD」でも久しぶりにヤリたくなつたなあ」と思い立ったときもこの方法を使い、その3カ月後には新しく開局したコミュニティFMのオーディションを受け、760人の応募者の中から選出されたのだ)この時点で、そんなつまみこと長期休暇が取れるのかとが、シーカヤックを借りるにはどうすりゃいいか、ガイドなしで知らない海域に出るのは不安だなあ、などということはとりあえず考えないのだ。まあどうにかなるわいと信じ切つて、あとは流れに身をまかせ。そしたら、アララ不思議、次々と沖縄関連情報や沖縄出身者と触れあふ頻度が急激に増し(こっちから求める、というより向こうからやってくるかんじ)、そしてとうとう決定的な出会いが訪れた。6月某日、俺は広島市内のカヌーショップが企画した、沖縄のシーカヤックフィールドを紹介するスライドショーなるイベントに参加していた。イベントは、沖縄カヤックセンターの仲村忠明さんという日本シーカヤック界では知らぬ人がないほどのパイオニアを招いて、彼自身のレクチャーを聞きながらスライドを見るという趣向である。もちろんこのイベントが開かれることも主催者から偶然に教えられた。さて、スライドショーは1時間ほどで終了。「せつかく仲村さんが来ておられることだし、場所を変えて懇親会でもやりましょう」と主催者が参加者に声をかけ、十数人でソウルミュージック系ショットバーへ向かう。エレベーターを待ちながら、俺がボサッと突っ立っていると、アロハシャツを着た日焼けカングロオヤジが人をかき分けながら近づいてきて「おお!小林イ、久しぶりー!ワシを憶えとるかあ?」とニコニコ話し掛けてきた。肩などバシバシ叩きやがってヤケに馴れ馴れしいオヤジだ。「ええっ



座間味沖の無人島にて。漕いで、泳いで、飲んで、食って、満天の星を眺めながら眠る。こんな漂流生活が4日目ともなると、脳ミソがフヤけてしまつて、思考回路も停止。私は一体誰でちよね?の図。

と、どちらさんでしよう?ゲツ、もしかして?!」  
 なんと、そのカングロオヤジは俺の小学校時代の同級生だったKではないか。20数年ぶりの再会である。お互いにオヤジはオヤジであるが、地に足が着いていないというか、精神年齢はあまり成長していないようですぐに打ち解けることができた。  
 ビール飲みつつ「オマエも沖縄、好きなんか?」とK。「いや、行ったこともないよ。でもいつか沖縄をシーカヤックで旅したいと思つてるんじや」と俺。「ははあ、そんならワシが案内しちゃるわいーワシやあ何十回も沖縄行つてるけえ隅々までよう知つてるんじや、まあまかしくとけえや。シーカヤックもワシのが沖縄のショップに預けてあるんじや。2人乗りじゃけえ、オマエも一緒に乗つて漕ぎゃあエエが」  
 まさに「渡りにフネ」とはこのことである。しかも彼は土地カンがあるだけじゃなく、幼馴染みというところでこ  
 れ程までに心許せる人物はない。  
 「ホ、ホンマかッ?で、いつ行くんなら」  
 「いつでもエエけえ小林の都合のエンジニア程をゆつてくれ。そうじやの、たとえば今年の盆あたりどうや?」  
 てなカンジでスイスイ話が進み、今年の盆、4泊5日沖縄・那覇・ケラマ列島シーカヤック50キロ酔いどれ流れ旅がホンマに実現してしまつたのである!それはそれは、イメージを遙かに凌ぐ夢のような数日間でありました、とさ。  
 そう、出来事には必ず、メッセージがある。偶然などない。それを意識しながら日々暮らしていると、だんだんメッセージの意味(意図)するものが読み取れるようになってくる、と俺は思うのよ。ある高名な数学者のハナシだが、無意識状態の時、極めて難解な高等数学の数式計算をぼんやり眺めていて、いきなり「解答」が閃くことが何度かあつたという。あとで計算してみるとそれが正解だつたそつな。似たようなことは物理学者や生化学者、天文学者とか、それこそ「科学界」の住人がかなり体験していることを本で読んだ。禅でいう「三昧(さんまい)」は、それにトコトンのめり込むことによつて現出する、無意識からの聖なるメッセージをキャッチするひとつの方法ではないのだろうか。俺の場合も先に「答」がやってくるカンジ。理由はあとからゆっくり考えりゃいい。中国拳法や禅の世界では、準備ができた時に師が現れる」という箴言があるがこれも的を得ているんじやなからうか。  
 見えざる手に導かれているようだった今回の沖縄無人島ツーリング。新しい発見と感動の毎日。ほんと、手付かずの自然が圧倒的なスケールで迫ってくる沖縄の離島は素晴らしいよあーその昔、瀬戸内海や中国山地の山々もこうだったのかも。環境保護の意義と無人島で飲むビールの旨さを再認識させてくれた旅だが、刺激が強烈すぎて、いまだ精神的に社会復帰できたらん(笑)。皆さんもいかが?いいガイド、紹介します。

# ついこなあだまで、 わしらの川の源は、ふかあーふかあー ブナの深山(みやま)じゃったんで その1 田中 幾太郎さんにきく



田中 幾太郎さん(ご自宅にて)

## 田中幾太郎さん プロフィール

1939年生まれ。島根県益田市在住。

日本動物学会、島根県野生生物研究会、郷土石見研究懇話会会員。

幼いころより山獺師であったおじいさん(祖父)から、里人たちが営々と守ってきた、人と自然との関わりへの知恵や「民俗の不文律」を学ばれる。それを立脚点に、半世紀にわたり西中国山地や石見地方の自然を見守ってこられた。

著書に、「消えゆく六日市の野生動物」(自費出版)、「山陰化石物語」(共著・たたら書房)、「溪流魚づくし」(共著・筑摩書房)、「いのちの森 西中国山地」(光陽出版社)。

この土地に人間が住みついていたのか、とうとうと暮らしを、文化を育んでくれている太田川。その太田川の水のふるさと 西中国山地。西中国山地は、太田川だけでなく、山陽側では山口県の錦川、山陰側では日本海に流れ込む、島根県の高津川の源でもあります。陰陽の多くの人々や生き物たちの生命を造り、支える西中国山地。太田川の水を頂く人口だけでも180万人とも言われています。西中国山地なくして、私たちの存在は考えられません。

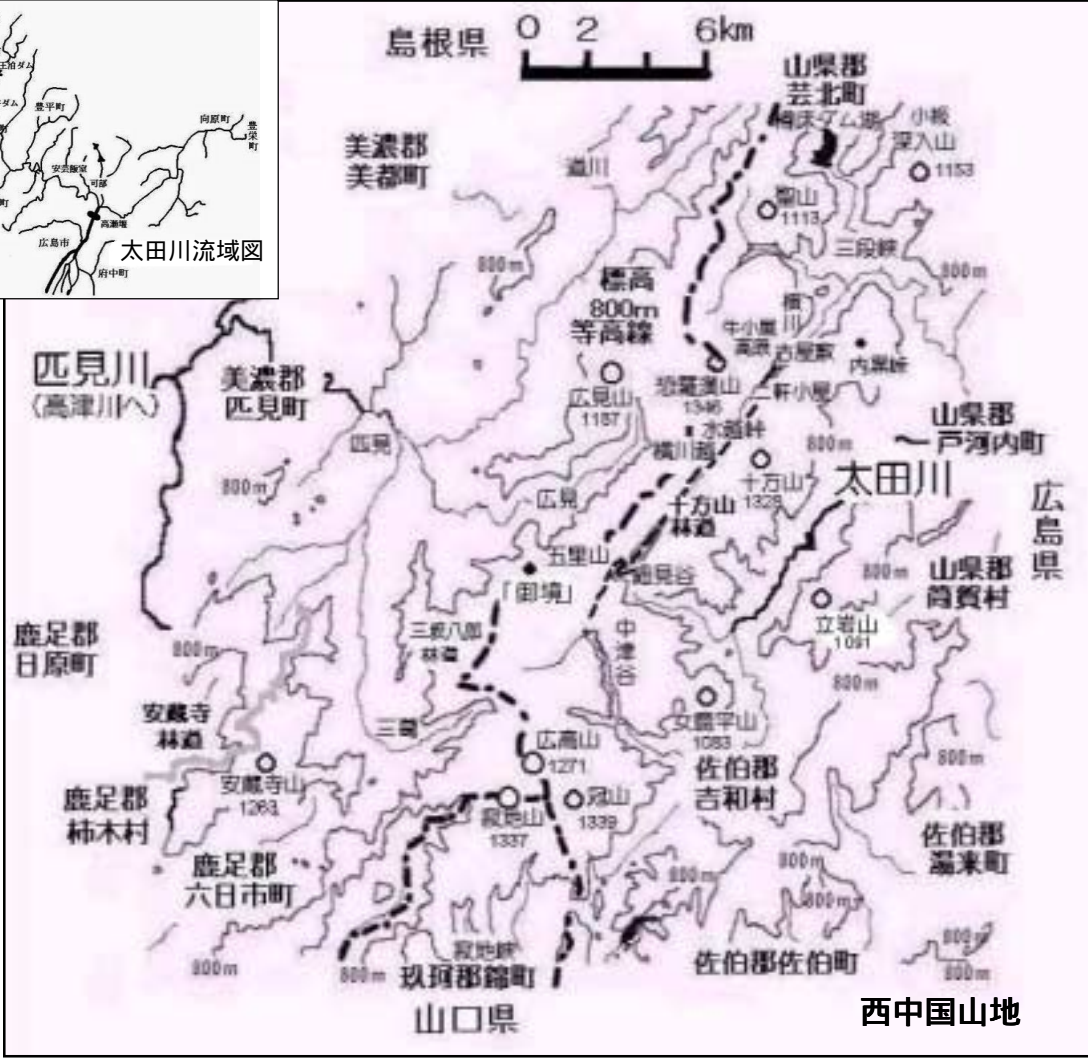
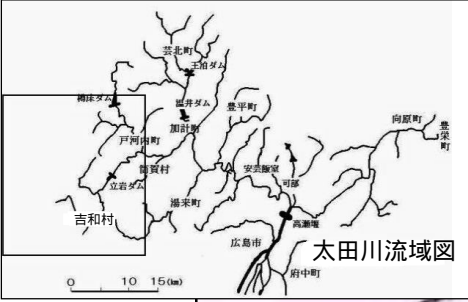
しかし西中国山地も、この数十年の間に、わたしたちの生活の変化に歩調を合わせ、急激にその姿を変えてきました。およそ半世紀にわたり、変化を目の当たりにしてこられた野生生物研究家の田中 幾太郎さんに、太田川・高津川・錦川の最初の一滴を生んでいる西中国山地の最奥部がどう変わってきたのか、そしてこれからわたしたちは何を考えていかなければならないのか、お聞きしました(二回シリーズ)。

それはそれは深あー森じゃった

わしははじめて県境の深山(みやま)に入ったのは、昭和29年のことです。昭和29・30・31年、高校1年から3年のときに昆虫採集で歩いたんです。まだ西中国山地は、植物とか昆虫の採集があまり入ってなかった。珍しい植物や昆虫がおって、いまでは考えられんほど深い山じゃったです。広見から、横川越を通って、細見谷へお入りで、そして水越峠を越えて二軒小屋へ抜けました。横川越は今もある道ですが、広見の人も、道あけ(道の手入れ)をするし、二軒小屋の方、古屋敷からも、道あけをして、大変大切にしとった往還道だったですよ。

そりゃあ、あの当時のあそこらあ言やあ、ちよつど伐採や道造りが始まっちゃあおったけど、そりゃあ本当に深あー深あーところじゃった。県境の一角は、谷底から尾根まで大変なブナの森じゃった。西中国山地には、島根県側にも広島県側にも、1950年代まで、よほどの獺師でなげにやあ、そこへ入る必然性がない、本当の奥山、深山というのがあつたんです。わしが昭和29・30・31年に歩いて、今でもよう覚えておりますが、とにかく深い、それまで営々と全く人の入らんかった森があつた。そりゃあ、匹見から吉和に越す山道の往還道はありましたよ、あつたけど、今の林道のような格好で、奥山が人の影響を受けるようなことはなかった。標高800メートル以上のところには、ブナやアシオスキの原生的自然林が広大無辺に残っていた。それより標高の低いところは、トチやサワグルミなんかが中心ですが。今の人はそれを知らんけえ、吉和にも戸河内にも本当の奥山はなかつたんじゃと言いますが、あつたんですよ。

ちよつど同じころ、樽床の集落がダムに沈められる前に、農協の二階に泊めてもらったこともあります。あのころの樽床の集落は、上の八幡からつながつって、桃源郷だったですよ。今時分の夏だと、ユウスゲの花が咲いて、その上に苧尾山があつて、それから、三段峡があつて、楓林館という、猿飛の二段滝に近いところに旅館がありました。そこを通過して、古屋敷に入って泊めてもらって、牛小屋高



原に上がりました。牛小屋高原は引揚者の方々が開拓に入って、和牛の放牧をしとりました。

わしが初めて西中国山地に入ったところが、

を植えていくわけですが、高知や和歌山の山師さんが入って、飯場を作ってやりよったです。拠点拠点は山師さんの飯場があった。炊事をする女の人もおったりして、

ちょうど拡大一斉造林のための林道の開設や伐採が始まったころじゃった。ブルドーザーというものがちょうど西中国山地に入りかけたときじゃないですか？いまの十方山林道、細見谷の方は、道はブルがあげたんじゃない、何も通らんような、開けたばっかしの道が水越から、古屋敷につながった。細見谷から水越峠にかけて、林道を作る工事が始まるとして、それが今の林道になっとるわけです。じゃけえ、始まりは昭和26年ごろでしょう、今の十方林道の形を造り出した。そして島根県側の一部や、広島県側では水越峠のまわりから十方山にかけての斜面では伐採が始まるとして、ですが、それでも細見谷のほうはブナの森で真っ暗だった。その中に、掘っただけのような感じの林道があった。伐つたブナは出してチップにしとりましたが、伐つた後にスギやヒノキを植えていくわけですが、高知や和歌山の山師さんが入って、飯場を作ってやりよったです。拠点拠点は山師さんの飯場があった。炊事をする女の人もおったりして、

からですけえ。

当時奥山の山仕事というのは、高知とか和歌山とか、あのへんからじょうに(たくさん)来てやりよったです。

それから当時、内黒峠から古屋敷にありて来る道を作りよったですが、まだ完全には通れるようになってなかった。そして、戸内から索道というものがあって、物資を古屋敷へもって行って、古屋敷の方からは炭を焼いたりして出しよったです。索道というのは、島根県側にもあったですが、益田から、匹見、道川に、炭や枕木を運ぶのに使った、広島県側にもあったケーブル架線です。

あれよあれよと言う間に上から下まで人工林に変わった

西中国山地というのは、太古の昔から、深山が1950年代まで続いてきておったんじゃけど、山が老年期で、侵食が進んだ、準平原化された非常になだらかな山だから、1950年代後半からの山地開発に一番手をつけやすい山だったわけです。最初に、西中国山地は山が優しいから林道を開設しやすいから、どこにでも言うわけじゃないけども、ブルドーザーが入り始めて、林道が開設された。広見の方からも、御境(島根・広島県境)のほうへ、吉和に抜けてはおらんかったけど、トラックが通れるぐらいの道が昭和29年にはできとったです。林道の開設が始まって、それにあわせて、架線ができて、同時にチェーンソーというものもがものすごいスピードで山を開発できるようになったんです。チェーンソーが始まったのは、昭和で言やあ、30年を超えて



細見谷のブナ林

まずブルドーザーで林道ができて、それから架線が入って、でもまだ木挽きがおつて、当時「改良刃」というのがあって活躍しとつたですが、地元の方は、なあとこの山あ、10年や20年で伐れるもんじゃなあ、いつて言いよつたですよ、それがあれよあれよというまにチエンソーで伐られてしまつた。吉和冠山の近くに、広高山というのが県境にあります。この広高山の周辺は、それは莫大な原生的自然林だつたですよ。この山口・広島・島根の広大な県境のブナを中心にした原生的自然林に、三葛から広高山に登ろうと思つて、昭和32年に行つたんですが、高知県の山師さんが中心になつて、大変な人数でこの山を伐り出しよつた。当時は、まだチエンソーは数が少なくて、木馬道（キンマミチ）が使われとつた。その地元のおじいさんが、ありやあ何十年かけても伐れるもんじゃなあ、いつて言いよつた。それがものの三年ぐらいの間で全部伐られてしまつた。これは、広島県側の吉和の方も、みな同じじゃないですか。そのあとが今の人工林になつとるわけだ。

皆伐が進む西中国山地  
(田中幾太郎さん撮影)

上から下まで年中真つ暗い人工林になつた

ただ、ところどころに点や線ではないですが、伐り尽くされなかつた原生的自然林が残つとります。広島県側で言えば、細見谷の谷底や、山口県と島根県の県境の、錦川の源流の深谷、これはカシとかの常緑広葉樹が主体ですが、自然林が残つとる。これは残したというより、とつてもない広い拡大造林の面積があるんだから、谷なんかのころころしたところをいらいすることは必要がなかつたんだと思います。どこでもそうですが、谷底の急峻なところなんかの作業のしにくかつたところに、自然な植生が今もつて残つてるところが多いですよ。そういうところへ、猿なんかというのは逃げ込んで、猿域というのをつくつとる。野生生物で、山の開発と一番最初に徹しく対面したのは、猿でしょうね。猿がそういうところへ逃げ込んだですよ。

## ツキノワグマのじま

(編集部：西中国山地を代表する野生動物にツキノワグマがありますが、先日毛太田川の中流で釣り人が襲われるなど、人里での

被害が深刻化しています。)

わしは長いことツキノワグマに関わつてきましたが、いまの状態は、本当に頭が痛い問題です。1950年代までの、西中国山地の、標高が800メートルより上の山を中心にした原生的自然林の中だけでずーっと生息して来た本来のツキノワグマと、今のツキノワグマは違つたんですよ。前にも言つたように、西中国山地には、1950年代まで、本当の奥山、深山というのがあつたんです。よほどの猟師でなければ、そこへ入ることのなかつた奥山があつて、こんなら(クマ)は、そういう奥山で棲息する習性というものをちゃんと続けてきた。

じゃけど、考えてみんさい、わしら人間の生活の在り様は、この五、六十年の間にものすごい変化したですよ。歩いて三段峡の方まで行きよつたのが、今は自動車でお米、あとは佃煮と漬物を持って行つて、それでもご馳走だと思つて食べよつたのが、いまはほんと、大変な飽食の時代ですよ。そういうわしらの生活の在り様の、文明大革命「ちゅうもの」が、この狭いところでわしらに接しとる野生獣というものに変な影響を与えんかつたはずはないんですよ。いまは、吉和のクマも、匹見のクマも、広島クマも、みんな同じですよ、広島市の街地にも、わしらの里山の方にも、出てくる。このへんのツキノワグマは全く習性が変わつてきてるんですよ。

## 「里グマ」から「平成グマ」へ

本来は、三十年ぐらい生きるクマですが、いま西中国山地を中心にして、里へ出歩いていろいろな社会問題をおこしよるクマなんかは、なんぼつとつても、七歳とか八歳、その間に、やつぱり駆除されたりするわけで、ずーっと長生きできとるクマなんかありません。長くて七年、八年。大体五、六年で、サイクルが交代するんですよ。そういう今のクマを考えると、七、八年前に生まれたとき、その自分を生んでくれた母グマといつしよに、どこで学習してきたか。生まれたときに、母親といつしよに育つたところは、せいせい里山、そして、母親といつしよに餌を探ることを覚えたのは、柿園や、栗園、蜜箱とかそれから、残飯とか、ほんと、人間の暮らしに非常に近いところで学習を積んできた、そういう習性を身につけたクマを、わしらは「平成グマ」といふとります。わしらは人間だけじゃない、わしらは接しとる野生獣はすべて習性が変わつてきてる。金太郎の、足柄山のクマとは全く変わつてきてるんじゃけえ、イノシシでも、タヌキでも、キツネでもみんな同じなんですよ。

昭和29年当時、匹見の方でも、戸河内の方でも、猟師の人らに聞き取り調査をしましたが、クマが出てくるなんちゅうことは全く聞いたことがなかつたですよ。匹見なんかの住民は、クマが住んでるということとさえ知らなかつた。よほどの猟師でなければ、あ知らなかつた。それだけクマの生息は、標高800メートルから上の、ブナを中心にした、原生的自然林だけに限られた。里山へ、なんちゅうことは、めつ

## 「深山グマ」から「里グマ」へ



二ホンツキノワグマの幼獣（生後二ヶ月）  
普通雌雄二頭を産む（田中幾太郎さん撮影）

たになかったです。そこへ、ブルドーザーが林道を開設し、架線を張って、チェーンソーで皆伐して、拡大造林をやったから…。人工林にみな変わったということはいろんな意味があつて、一つは、ああいう大型獣というのは、むしろに家が必要であるように、深い広葉樹の森が自分らの家なんです。餌だけの問題じゃないんです。森があることイコール彼らの生息環境の基本なんです。その森には、冬場に入る大きな穴を提供してくれる、木がある、そして、四季を通して餌を提供してくれる森がある、そういうことが必要なんです。

（同席された吉和村の方：五十代男性・わしが子供の頃は、里にはおらなんだですよ、話も全然聞いたこともなかったし。）

吉和の女鹿平山でも、あそこを昭和40年代には全部伐つてしまつたですが、それでも、里へはクマはおりにこんかつた。我慢して我慢して奥におつたんですが、どつても山におれんような付加的な状況の変化がおつたんです。

たえば、養蜂ですが、1960年代より以前の養蜂というのは、レンゲとか、菜の花とか、田圃地帯でやっていた。ところが、1960年代のなかごろになると、山の木の花から集める蜜のほうぐええ言うて、今の時期でいやあ、リョウボという木の花が咲いとるけど、養蜂業者が林道を使つて、谷の奥まで西洋ミツバチの蜜箱を置いた。結果的に、クマを誘い出すようなことをした。そして、里山にはそれまでなかつたよな、栗園や、柿園ができるようになった。クマを誘い出す要因が、1970年代に完成したわけです。それで、クマも1970年代には、里山へおりにくるのが、常識」になった。むしろはそれを「里グマ」と呼んどりますが、「里グマ」傾向というのは、決してすぐおこつたんじゃないですよ。1970年代から1980年代におこつた。そしてその中で、習性が固定されて、もう里山から里だけで、回遊するようになった、「広島グマ」とか「益田グマ」が、1990年代に定着した。そして、いま、2000年、クマの習性というのは全くもどに帰ることはない、「平成グマ」になつてしまつた。山の環境の変化から大体、十年から、

十五年ぐらゐの遅れで、クマの習性の様変わりがある。「深山グマ」から、「里グマ」、「里グマ」から「平成グマ」、決して遺伝子には変わつておらんけど、彼らが後天的に身につけた習性というのは、取り返しのつかんほど変わつてしまつた。そりゃあ、戸内の方でも、山にクマを植えたり、ナラの木を植えたり、呼び戻す作戦を展開しとるけど、それで、クマを奥山に返すことに成功するか言やあ、そんなことはないと思います。

本当にクマが「平成グマ」になつて、人間の家に入り込むようになった。「平成グマ」というのは何がいかんかと言え、まづ精神的な被害ですよ。家の中に入つてくる、人間を見て逃げんようになった、そういう精神的被害が大きい。

人間の生活の変化が野生動物に与えた影響というのは、種類によつてそれぞれ違つています。たとえばイノシシ、これは藪の動物なんです。山里いうものが、休耕田なんかで、荒廃してきて、山里から里が非常に荒れてきたですよ。はいじゃけえ猪にとつては、生息の環境条件がかえつてよくなつたわけです。それで非常に繁殖して、増えとります。同時に、習性も変わった。猪なんかわしが小さいころは絶対に人目にくることはなかつた。深いところに隠れておつたですよ。いま畑をやつとつても、猪が、道路をまたいで出るようになった、トウモロコシもみなやられるようになったですよ。

でもクマの場合は、本来の生息環境を考えた場合、人間が残飯は投げるし、柿園でも栗園でもあるからいま里に餌がいっぱいあるいつても、彼らが将来増えることので



クマに越冬穴を提供してくれるトチの大木  
地上10mぐらゐの樹洞（田中幾太郎さん撮影）

きるような生息環境だということとは全くないと思ひます。クマが市街地に拡散してきとるといふことは、やっぱり絶滅していく、大きな前兆でしょう。こゝら（益田）でもクマが町で何回も人目についとりますが、決してイノシシのように増えるわけではな。

### それでも「深山グマ」は残っている

（編集部：人と何らかの接触があつたクマを捕まえて山に放す「奥山放獣」という方法がありますが、あれは放してもすぐに里へおりにくるんですか。）

そうですね。そう考えりやあ、クマの将来というのは絶望的ですが、唯一の希望は、わしらも歩いてみて、それぞれ点と線としか残つたらんけども、西中国山地には、ブナを中心とする自然林が残つとるところが

インタビュー  
シリーズ

100%クリーン

## こちら夢中力発電所！！

# 吉和の自然を考える会

谷田二三さん、早田光昭さん、三浦孝治さん



吉和村の「小屋」にて

左から、谷田さん、早田さん、三浦さん

この村の財産をいつまでも・・・

このコーナーでは、「こんなふうに変わっていかんかのう。こうなったらええのう。」といるんなことに取り組まれているグループや個人の方にインタビューします。今回は、太田川源流の地吉和村で、私たち、太田川市民にとつても子孫への大切な預かり物である、西中国山地の山や川をまもろうと立ち上がった、「吉和村の自然を考える会」のみなさんに、吉和川の素敵な「恵み」を頂きながらおかがいしました（以下はスタッフのみなさんのお考えで、発言者を特定していません）。

## ブナの森が壊される

なぜ会を設立されたのですか？

「だいぶ前から、この村の山や川が以前の輝きを失いつつあるのに心を痛めていました。川にはゴミが散乱するようになり、開発の影響が山が荒れたせいか、水の出方も昔とずいぶん違ってきました。護岸工事などで生き物も減りました。でもこれまでは、釣りをしたときにまわりのゴミを拾って帰るぐらいのことしか出来ませんでした。なにかできることはないだろうか。いつもそう思っていました。そんな折に、吉和村の奥山にある、細見谷の渓流のブナの森に、『大規模林道』という舗装道路ができる（十方山林道の大規模林道化）ことを知り、すでに工事が進んでいる戸河内町の二軒小屋から東の現場を実際に見学する機会がありました。これまでもそういう噂はおぼろげに聞いてはいたのですが、詳しいことは村民に知らされてはいませんでした。私たち自身が無関心だったということも否定できません。

吉和村の一番の財産は、この自然だと思えます。特に十方山麓のブナ林は、中国地方にはもうほとんど遺されていない貴重なものです。一度行かれたら分かりませんが、このあたりではまずほかに目に

することのできない、口で言い表すのも難しいほど素晴らしいブナ林と渓流です。太田川の豊かな水を生む水源という意味でも、とても大事なところですよ。なんとしてもこのブナの森をまもりたいと思い、この6月から呼びかけを始めて、人数は少ないんですが、動き始めることにしました。」

活動を始められて、いまだになことを感じておられますか？

「いろいろ調べてみて、『大規模林道』が吉和村にとってどうしても必要なもの



”水神様” ゴギ





吉和村の宝 細見谷

なのか、大変疑問に思っています。あのあたりには人が住んでいるわけではないから、生活道路としての意味はありませぬ。仮に工事が舗装だけだとしても、その工事で失うものの方が大きいのではないかと気がしています。芸北町の臥龍山では自動車の通れる道路を付けたために、ブナ林に悪い影響が出ていると聞いています。吉和村に大規模林道を造ろうという動きは二十年以上前からあるようですが、当時と今とは、社会的な状

況がまったく違います。当時必要でも、いま必要なければ、工事をする理由はないんじゃないでしょうか。そういうところがきちんと議論されずに計画だけが進んでいるような気がします。」

### とことん議論をして結論を

今後はどんな取り組みを？

「まず、今が正念場である十方山林

道の問題を、特に地元の方々によく知っていただくために、いろんな仕掛けをしていきたいですね。細見谷の、現在では中国地方随一といっても言い過ぎではない、ブナを中心としたあの渓流がどんなに素晴らしいものか、そのブナの森を守ることはどういう意味があるのかをお伝えすることができればと思います。そのため、写真展や学習会などを企



いつまでもこんな川でありますように...

画していきたいですね。

それから、『大規模林道』がどんな計画なのか、どんなメリット・デメリットがあるのか、私たちも学びながら広くお伝えして、これからの吉和村にとって何が大事なのか、納得いくまでしっかりと話し合える議論の場を作ってお手伝いをしたいと考えています。今のままでは、お役所の机の上の考えだけで計画が進んでしまっています。最近、無駄な公共事業や環境に対して悪い影響の大きい事業は中止する動きが始めています。私たちも自分たちの地元の問題なのですから、いいことも悪いことも充分に議論したうえで結論を出せるように、行政にも村の方々にも働きかけていきたいと思

私たちの大切な「預かり物」を子供たちに引き継ぎたい

メッセージをお願いします

吉和には、これからずっと子供たちに残していかなければならない、とても大切な自然が、細見谷だけではなく、たくさんたくさんあります。でもこのままでは、それも無秩序にどんどん壊されていくような気がします。この自然の大切さを、地元の方々だけでなく、この村を訪れてくださる方々、それから同じ太田川の水を頂く多くの方々に、知って欲しい。そしてそれを壊さずに楽しく暮らしていける地域のあり方を考えていきたいと思ひます。これから、吉和村の自然と、自然に関わる開発などのいろんな問題をお伝えするために、写真展や学習会など、いろいろ企画していきたいと思ひます。ぜひご参加ください。

「吉和の自然を考える会」の活動へのお問い合わせは、

0829 77 2852

プラスワン内 谷田 二三 さんへ

インタビュアー 2001年8月5日

原 哲之

連載

## 太田川水系の生き物たち

## 昔の姿いまいずこ

万葉集巻八に山上憶良によつて、秋の七草が詠まれている。

萩が花 尾花葛花 なでしこの花 女郎花 また藤袴 朝豹の花

ハギ、ススキ、クズ、ナデシコ、オミナエシ、フジバカマ、キキョウこの7種の植物を、具体的に思い浮かべることができる人は、かなり自然に親しんだ生活をしていると言えるであろう。

また、秋の野辺を散策していて、身近にこれらの植物を見つけて、身近にこれら植物を見つげることができるよつであらば、その地は、万葉の時代の自然が保たれていると言えるであろう。

この7種の植物の中で、思い浮かべにくい、または、見つけにくいのはどれであろうか。野生のフジバカマを見たことがあるだろうか。



藤袴（フジバカマ）

撮影： 渡辺 泰邦

何人が来てぬぎかけし 藤袴  
来る秋ことに 野べをにははす

藤原敏行

「来る秋」とどころか、ここ数年間、太田川流域でフジバカマは、注意して探しているが、見つからなくなった。1992年に建設省が行った「河川の国勢調査」で発見されたが、次の1993年に調査したときには消失していた。

最近の記録では1996年に加計町でフジバカマ発見とマスコミをにぎわしたが、そのとき撮影した写真、これが最後の記録になる。

8月より10月、淡紫色の花を咲かせるヒョドリバナに似た植物で、生乾きのときよい香りがする。その香りの成分クマリンは、桜餅の香り、古くより香草として身につけたり、風呂に入れたりして、人々に親しまれていた。

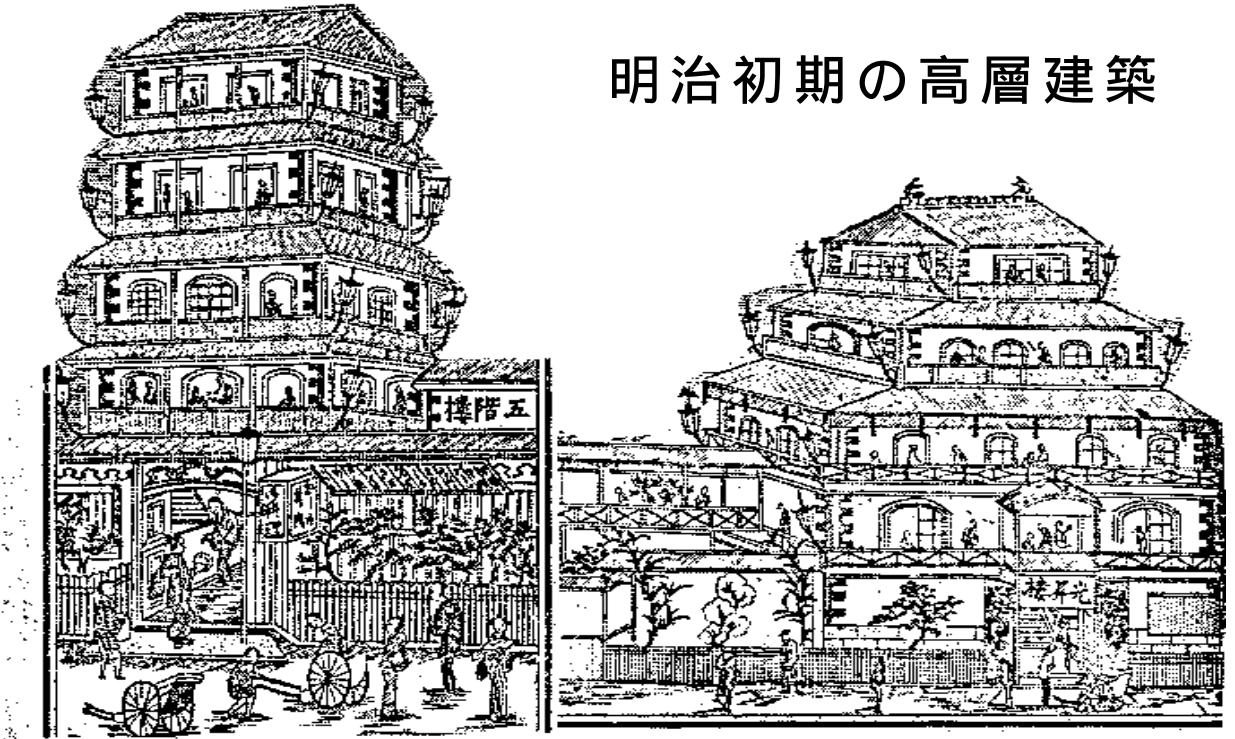
そのフジバカマが忽然と姿を消したのは、なぜだろうか。それは、自然堤防などの平野部の草地に生えるフジバカマにとって、生育に適した自然草場が開発されてほとんどなくなったためである。

川が年に何度かは氾濫し、肥沃な氾濫原ができる、その自然の営みが、ダムや人工堤防の建設などにより、川が氾濫しなくなったとき、フジバカマは生育適地を失い、消えていたのである。

渡辺泰邦 二〇〇一・八・二九逝去

# 絵画・写真で蘇る太田川 その五

## 明治初期の高層建築



### 五階楼と光昇楼

藩政時代が終わって明治になって、広島町はいろいろと新しいものが現れるが、その一つがそれまでの町家風にならぬ高層建築である。明治16年出版の「広島諸商仕入買物案内記」の中に五階建の料亭が2軒、四階建の料亭と遊技場揚子店が1軒ずつ描かれている。当時の広島町に現われたこのような建物はさぞや人々の注目を浴びたであろうと想像される。

この買物案内記という本は懐に入る小型だが、138丁の分厚い和装袋と同じ本で、市内の257の商店が丁寧に描かれている。多い業種を挙げてみると、酒酢醤油醸造販売店27。薬種店20。旅館商16。呉服反物店13。漆金銀細工店12。菓子店12。鬢付油紅白粉（化粧品）店11。料理8などで、このうち料理店は旅館も兼ねているものが多いし、他に、汽船・運送問屋7。も旅館を兼ねるから、この数字は適当に判断願いたい。

さてそこで五階建料亭のことである。左が細工町の「五階楼」で

高さ拾壹間半（約20メートル）と書いてある。経営者の名は書いてない。紙面の都合で上下をカットしたが、前の道には人力車や人や屋台が描いてある。細工町とは現在の原爆ドームの位置で、猿楽町と横町との間に南北に細長い町であり、現在の西向寺付近にあったのではないかと思われる。さらにその西側に米田良平の支店で4階建の料理店があった。

右図の光昇楼の方は西地方町新大橋西詰と書いてある。新大橋は今の西平和大橋のやや北側で、したがって中国新聞社のある位置あたりでは、と推測する。

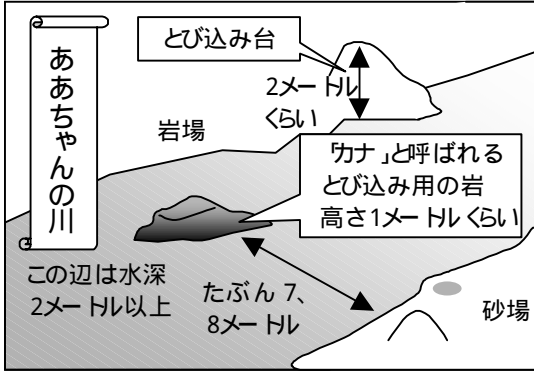
これら明治十年代の高層建築については広島市公文書館の「紀要」第十二号に『五階楼の建築的研究』という表題で発表されているが、建築技術者はむろんのこと、建設年も解体年も不明であるという。建築物に限らず明治の前半期は不明な部分が多に多い。藩政の束縛から解放された商人の一部がこれまた新しいものを求めた棟梁たちを刺激して完成させたものであったが、それは長くは維持できないうで消えてしまった。（幸田）

投稿

# 川遊びは楽しい



—ああちゃんとおにいちゃん(1970年頃)



ああちゃんは川で泳ぐのが大好きでした。ただ好きなきに泳げたわけではありません。夏休みの午後1時から3時まで、保護者の監視のもと川で泳ぐことが許されていました。監視は当番制で、小学生の親たちが交替でやってくれました。大きな黒い浮き袋と時間を告げる鐘が当番のしるしです。ああちゃんのお母さんは、仕事を休んで当番をしてくれました。

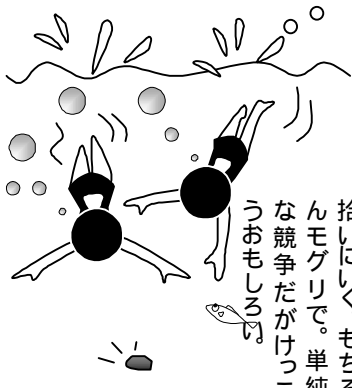
二〇分泳いで一〇分休憩(たつたと思う)のくり返し、休憩中は砂山を作ったり、池をつくったりして遊びました。ほんとうに楽しかったです。当然ながら、今、こんな制度はありません。子供が減って、当番制ができなくなつて、川が汚れて...

自分が育つた環境がとも幸せだったとつくづく思います。みなさん本当にありがとつ。

それでは、ああちゃんがやつた楽しい川遊びを紹介しましょう。

## 一、モグリ競争

水中に投げた石を、ふたり同時に拾いにいく。もちろんモグリで。単純な競争だがけっこうおもしろい。



モグリが上達する程に、深く遠いところへ石を投げるようになる。(実は訓練だったんだと今ごろ気づいた。)

## 三、連続とび込み

飛び込んだときの泡が消えないうちに次のとび込みをしなければならぬ。



一人でやってもよいが、かなりきついし、むなしいで数人で行く。なにがなんでもとび込むという根性が身につく。

## 二、かつぱのまね

泳いでいる友だちに、水中からこっそり忍び寄りいきなり足をひっぱる。



驚いた友だちにあるごをけられることもあるが、自業自得なので文句はいえない。

## 四、つきおとし

スキをみせた相手は遠慮なく水中へ落とす。



けっこうワイルドですよ。危ないからやめろとか言われそうだけど、みんな加減は知っていました。だって死んだ子はいませんもの。

《ああちゃんプロフィール》現名 三浦由紀子、テツツンのおくさんの職場の友人である。太田川の中流(安佐北区安佐町久地)で幼少期を過ごし、太田川をああちゃんの川と思い込んでいる。

## 「環・太田川」ホームページ掲示板より



HPのロゴです！

いま、「環・太田川」掲示板がおもしろい！！

アクセスできない方のために、ちょっとだけ紹介しちゃいます。

アクセスできる方は、<http://all.at/ootagawa> へGO!

(うまく飛べないときには、

[http://hiroshima.cool.ne.jp/kan\\_ootagawa/top.html](http://hiroshima.cool.ne.jp/kan_ootagawa/top.html) へ！)

**最近書き込みが常連さんに固定してしまっているの、みんなも気楽にがんがん投稿してね。内容は、おおたがわみずの季節の話題や、おもしろ情報、広く訴えて議論したい地域の問題などなど、なんでもOKよ!!**

タイトル: クラゲと海岸整備

投稿者 : イカの骨

登録時間: 2001年8月13日13時11分

本文:

私は海育ちですが、お盆を過ぎると土用波とクラゲが増えるので、あまり海に行くなと親から言われていました。時事通信のトピックスにクラゲの話題があったので一部紹介します。

「クラゲを研究している東京水産大学の石井晴人助手によると、最近は沿岸でクラゲが増えている。えさの小型プランクトンが多い上、コンクリートで固められた海岸が幼生にとって格好のすみかになるなど、クラゲの生息環境が良くなったのが増加の理由だ。」<http://www.jiji.co.jp/>

海岸整備の現状を見たとするほど納得してしまいます。広島県の自然海岸は33%(せとうちネット<http://www.seto.or.jp/seto/kankyojoho/index.htm>) 広島は島が多いので沿岸部に限れば数パーセントか?

海岸は縦割行政の見本のようなもので、河川、港湾、漁港、農業(農地)、その他(旧建設省管理海岸)がそれぞれの方針で整備しています。高潮や浸食防止が目的なのに、環境整備の名目で忽然と人工の海水浴場が出現したりして摩訶不思議です。

それで、縦割りとは自然に配慮しなかった反省から、広島県では関係機関が集まって次期の整備計画(平成15年から5ヵ年計画)の構想を策定する準備をしています。14年中が計画策定期間なので、関心のある方は注目しておいてください。

タイトル: Re: クラゲと海岸整備

投稿者 : イカの骨

登録時間: 2001年8月15日13時13分

原 哲之さんは No.234「Re: クラゲと海岸整備」で書きました。

>原です。しかし「整備計画」とは、新たにさらに工事する、ということですか?これは馬鹿馬鹿しい話かもしれませんが、今ある埋立地や護岸を崩して、次の大水などで自然に渚>や干潟を造ってもらう、というような計画はありえないのでしょうか。それで被害に遭う可能性のある方のことなどを考えると、やっぱり無理ですかね。でもそうでもしないと、人工干潟や藻場のような「工事のための工事」でない、本物の干潟や藻場は戻ってこないような気がするのですが・・・。

本文:

先日、ダムを壊し自然を取り戻すテレビ番組を見ました。洪水で氾濫原になる地域はパイアウトと称し、州政府?が土地を買い取りその後は手を付けず自然保護区に指定すること。人口の少ないアメリカだからできることかなとも思いましたが、日本なりに自然と共生していく道も探るべきではなからうかと気を取りなおしたところです。

遺伝子の世界に「赤の女王仮説」というものがありますが、日本の公共事業も似たようなもので、常に走り続けていないと自滅してしまう性質のようです。その際、自然への配慮も多少なされますが、検証する制度がないので結局、うやむやになっています。

構造改革、公共事業削減といいながら、もう補正予算の噂が飛んでいます。これは対象外なのだろうか? (「赤の女王仮説」とは、1980年にウィリアム・ハミルトンが唱えた説で、遺伝子は寄生虫(パラサイト)等の攻撃に耐えるため、常に変化をしなければならない。それを、鏡の国のアリスの中に出てくる、赤の女王が常に走り続けているのになぞらえた仮説です。)

「環・太田川」では、皆さまの活動・取り組みを応援しています。  
イベントや活動への参加を呼びかけてください。情報をお待ちしています。  
お気軽にお寄せくださいね。

写真展 & 講演会

## 『十方山林道と細見谷』 開催します！

### 「吉和の自然を考える会」

「わたしたちの古里 吉和村」は中国地方でも随一といわれるほど、豊かな自然の残された場所です。しかし開発が進み、吉和川(太田川の源流)も昔の清流ではなくなり、ツキノワグマも居場所を追われ、人里に出没するようになりました。

大規模林道建設計画のある十方山林道(細見谷)のブナの森は、西中国山地でもとくに貴重な場所といわれています。ブナだけでなく、ミズナラ・トチノキ等大きな樹もたくさんあります。わたしたちは、古里吉和の自然の素晴らしさを多くの方々に知っていただいて、いっしょにいろんなことを考えていきたいと、写真展と講演会を企画しました。吉和村の方も、村外の方もふるってご参加ください。



開催日： 9月13日～16日

場所： **吉和中央公民館**

吉和村役場横

講演：9月16日午後1時より

「郷土の自然に

**連帯して生きる」**

講師：田中 幾太郎さん

(島根県野生生物研究会)

主催：吉和の自然を考える会

後援：森と水と土を考える会

お問い合わせは、 0829-77-2852 プラスワン内

谷田 二三 へ

いっしょに  
やま専科

## 第9回大規模林道問題全国ネットワークの集い

**西中国山地は今** 大規模林道問題を考える

にご参加ください。

**森と水と土を考える会**

大規模林道ってなに？「大規模林道」はあまり馴染みのない言葉かもしれませんが。「大規模林道」とは、緑資源公団が1970年代から進めてきた、高速道路のような二車線7メートル幅（原則）の舗装道路を、日本列島の脊髄をぶち抜くように建設する事業です。太田川の源流域、西中国山地でも、この大規模林道が建設されつつあります。計画ルートには、中国地方では最大級のブナ林である、十方山（佐伯郡吉和村）の麓も含まれています（十方山林道の大規模林道化計画）。

私たち「森と水と土を考える会」では、1990年の会設立より、十方山林道の大規模林道化に反対してきました。なんとしても遣されたブナの森を守りたい この一心で、このたび、日本全国で大規模林道問題に取り組まれているグループのネットワーク、「大規模林道問題全国ネットワーク」の全国集会を、ブナ林が育む太田川の水を頂く、ここ広島で開催することに致しました。

「集い」では、無駄な公共事業としての大規模林道の問題点を告発し、西中国山地の自然の現状を報告する講演会、全国の活動の報告会、それから大規模林道建設現場と予定地（十方山林道）の視察を行います。お誘いあわせの上ふるってご参加ください。全体を通しての参加だけでなく、それぞれのイベントに単独に参加することも可能です。

**日程**

**10月6日(土)** 会場： 弥生別館 山陽荘（広島市東区大須賀町、広島駅より徒歩10分）

**13:30～15:40 講演会**

**公共事業と大規模林道**（藤原 信； 大規模林道問題全国ネットワーク代表）

**西中国山地は今**（金井塚 務； 西中国山地自然史研究会・宮島自然史研究会）

**16:00～18:00 報告**（ここまでの参加費 500円）

**ネットワークの集い**（広島・愛媛からの報告、全国からの報告、まとめ）

**19:00～21:30 交流会**（参加費 3,000円）

**10月7日(日)**

**現地視察&もみじ狩りウォーク**

8:00 広島発（県庁北側） 10:00 戸河内町二軒小屋着

**大規模林道建設現場視察&建設予定地ウォーク**

15:00 **青空全体集会** 16:00 現地発 解散

（参加費 マイクロバス利用 2,000円 資料代 500円

自家用車利用 資料代 500円）

**お申込・お問い合わせは、082-296-1444（Fax兼用）森と水と土を考える会か、082-293-6531（Fax兼用）原戸へ9月末までに（必ず詳細をご確認のうえお申込みください）**

# 環KAN学GAKU

## エネルギー その五

### トンネルを通る水には生命を育むことはできないの巻

太田川は筆者たちの世代が生まれる少し前に、いや悪ければ戦前から、流域社会にさまざまな形の「犠牲」を強いながら、全国でも稀な、完全かつ一貫した「形で電源開発された立岩ダム、王泊ダムやいくつかの発電所は、戦前・戦時中に建設されている」。前回まで、発電所が建設されていく過程でおこったことをちよっとだけ調べてみたが、「完全一貫電源開発」の完成は、人間もその一員である流域の生態系(エコシステム)にどんな影響を与えているのだろうか。

日頃川と一番付き合いが深いのは、川漁をする方々だろう。そこで、太田川漁業協同組合におうかがいして、水力発電に関連し、太田川ではどんなことが起こったか、過去の業務報告書を読ませていただいた。それから、できるだけ川筋を歩いてみて、地元の方々が釣り人さんにインタ

ビューさせていただいた。

### 川の水が減るといえるんなことが起ころ

誰もが口をそろえて最初におっしゃるのが、堰の存在でアユやウナギ、サツキマスといった川と海を往ったり来たりする魚が天然では繁殖することができなくなったことだ。サツキマスなんかは、戦前は国内有数の漁獲量を



三段峡の水を取る柴木川第一発電所

誇った時代もあるらしいが、今は見る影もない。レジャーフィッシングや川漁ではあまり重要視されない魚についても、移動の大きい種類はこの何十年間かで極端に減ったという。

では川を流れる水の量が減ることで何が起こったのだろう。川漁に大きな被害をもたらしたのが、夏場に水温が異常に上がりやすくなったことだ。異常高温により、アユに病気が出たり、ひどいときは大量に斃死することもあった。特に昭和53年の猛暑での被害は大きく、アユ数万尾が死んだとみられ、7月23日付の中国新聞朝刊広島版ではトップ記事にもなっている。夏の暑い年には、斃死にまで至らなくても、高温のため病気が発生するといふ被害が繰り返されている。

魚病の発生や斃死は目に見えて分かる被害だが、流量の減少は、川のそばですっと生活していないと感ずることのできない、「微妙な」影響を与えている。たとえば、発電所が出来てから、川筋では昼と夜の温度差、季節による温度差が大きくなったという。河口のデルタの上でも、川の近くでは夏は涼しく、冬は極端な冷え込みがないように、水の存在は気温の変化を和らげてくれる。霧も発生しにくくなり、こうした(微)気象の変化が、周囲の樹木などに悪い影響を与えているとおっしゃる方



建設から60年を超える立岩ダム

もあった。

それから、太田川漁協の業務報告書に数年に一度は出てくるのが、大雨の後、異常な濁流が長期にわたって続くことによる被害である。昭和60年度の業務報告書によれば、7月に二週間に上りわたり濁流が続ぎ、漁協では電力会社に抗議を申し入れている。これは上流に発電用のダムがあり、ダムにいったん濁った水を溜めてから放流することが関係している。地元の方々のインタビューによれば、普段のちよっとした雨でも、川が「不自然な」濁り方をすると、多くの方が違和感を





小さな支流にも取水堰が 左に見えるのが魚道

感じておられる。

発電は人間がやることだから、事故やトラブルもつきものだ。昭和57年度の業務報告書によれば、6月に太田川発電所の事故による異常放水で、漁協関係者の負傷事故がおこっている。昭和47年の集中豪雨のとき、立岩ダムより下流で出水による被害が出て、それがダムの操作が原因ではないか、と問題になったことはよく知られている。ダムに近い地域では、ダムが老朽化していることに対

して強い不安(ダム崩壊への恐怖感)を抱いている方もいらっしゃる。ダムや発電所の存在は、そこに住まう方々に物質的な影響だけでなく、大きな精神的苦痛も与えている。

### これまでの「改善」は小手先の域を出していない

太田川漁協では事態を憂慮し、昭和57年には沿岸住民七千名あまりの署名を集めて、河川維持用水の確保について建設省(現国土交通省)、広島県、広島市、中国電力に陳情書を提出されている。陳情書には、河川流量が少ないことによる弊害として、1. 水質が悪化し、夏期に遊泳できない、2. 灌漑用水、生活雑用水に不便になった、3. 水位の大きな変動や、異常放水がしばしば発生する、4. 霧が少なくなり、気候緩和の役割を果たさなくなった、5. 魚の種類、量が減り、川魚が衰退した、6. 夏季に水温が異常に高くなり、魚病が発生し、大量斃死したこともあり、ある種の藻類の発生によって、水が臭くなることもある、7. 堰堤が存在するために、魚の回遊ができない、の七点が指摘されている(昭和62年度業務報告書)。

このような地元の方々や市民グルー



発電用導水路

プなどの粘り強い努力によって、電力会社による夏季の放水量が増やされ、ダムによる異常な濁流の発生に対しても、対策が立てられるようになった。また、平成四年には、太田川は「魚がのぼりやすい川づくり推進モデル河川」に指定され、堰には魚道が取り付けられ(発電用以外の取水堰についても)、広島湾から山県郡戸内町まで魚の遡上が可能になった。

しかし、実際に川筋で多くの方々に話をあつかいがいした限り、これらの

対策は、残念ながら決して「小手先」の域を出ていない、という気がしてならない。もちろん、ちよつとずつでも川に水が戻ることはとてもすばらしいことだと思つし、実際に改善された問題も少なくないという。でも、本質的には「一番取水がひどかったころより少しよくなった程度」なのではないだろうか。「魚がのぼりやすい川づくり」という言葉の意味は「人間のせいではほとんど全く魚がのぼれなくなった川を工事して、ちよつとだけのぼりやすくする」ということではないだろうか。今の魚道は、アユやサツキマスといった、釣りや川漁に重要な種類には通りやすくても、それ以外の種にとっては必ずしも遡上しやすい構造ではない、という指摘もある。「エコシステム」とはそれを構成するすべての種類がそろって初めてバランスがとれるものではないだろうか。

また、維持流量が少ないから、発電量を減らして放水量を増やすのではなく、それを温井ダム建設の一目的に「吸収」し、そのために、山を削って一集落を水底に沈める感覚は、筆者にはちよつと理解できない。本末転倒ではないだろうか。海の向うでは、ダムを撤去して生きた川を取り戻すことが現実に進められているが、この国のよう



巨大な発電用調整池 宇賀ダム湖 左に導水管から水が流れ込んでいる

に平野が少なく、人口密度が高いところでそれをどう実現するか、そのために知恵と頭脳を結集することこそが、本当の「回復」のために必要なことではないだろうか。

## 回復の世紀へ 問題は複雑だ

戦前から太田川の電源開発に直面してこられたある古老によれば、戦前の電源開発は軍都広島のための地域住民に有無を言わせぬものだった。戦後は軍国主義ではなくなったが、

こんどは国や県を挙げての施策、「生産県構想」など）として、反論できる雰囲気にはなく、発電所建設によっておこる地域の不都合に対しては、全て「補償」によって解決し、決して計画そのものを縮小の方向で変更しようというものはなかったという。そしてそれは、結局「経済都市」広島市拡大のためでしかなかったのではないかと、行政や電力会社、さらに下流の広島市民に対して不快感をあらわにして語られた。

「戸河内町史」によれば、たとえば戸河内町横川地区は、三段峡の水を取る柴木川第一発電所からわずか数キロメートルしか離れてないにも関わらず、多年にわたり自家発電を強いられ、目と鼻の先の大規模発電の恩恵に浴することができなかつた。昭和20年代後半の「芸北特定地域総合開発」の指定にしても、昭和30年代になると地元では、「総合開発」としても結局は電源開発ではないか」という声が聞かれていたという。

「取り戻せるものだったらかつて太田川を取り戻したい。ライフスタイルの見直しも含めて、より電気を使わないことも含めて、戻せるところまで戻したい。これは、太田川の上流から下流まで、全域に暮らす全ての住民の共通のテーマになるべきではないでしょうか

か。特に電気の消費は下流の広島に集中しているのだから、広島という都市のあり方から考えていかなければならないのではないですか。「中流域でインフラを確保したい」といっているときの、

ある方の発言だ。そのためにまず、何をしなければならぬだろう。電気を大量に使わなければ大きな発電所はいらなくなるから、単純に考えれば、やはりこの「太田川水圏」ができるだけ電気を使わない社会になるよう考え、実践していくのが「はじめの一步」ではないだろうか。「緑のダム」で治水や治水の面からみてもコンクリートダムが不要になるという研究成果もあるし、

電気さえ使わなきゃあ、ダムもいらんようになるで。と、ここまで考えて、頭が止まってしまった。

さてよ、ふだんスイッチを入れたりやあ電気は使い放題じゃが、実際どんくらい電気を使うとるんか、よう考えたら何も知らんのじゃないか？ それにわしらが使つとる電気のうち、水力発電が占めとる割合はたいしたことないんじゃないか？ 太田川での夏の放水量が増えたのも、裏を返せば、ほかの方法で充分発電できるよつになつたけえじゃないんか？ 確か昔学校で火主水従という言葉を書いたことがあるで。いまはコンピューターの時代じゃし、いろんな発電方法を組み合わせさせてやつとる

んじゃないか？ ほかの発電方法にもいろいろ問題があるんじゃないか？ 電気の問題を水力の範囲だけで考えるわけにはいかんんじゃないか？

……ということで、次回からは、私たちが「太田川市民」と、水力以外の発電との関係について調べてみようと思う。

（実は太田川には、土師ダムから江の川の水を取って発電する可部発電所や、「電気を使って電気を造る」揚水発電所という不思議な発電所があつて、それらのことも調べてみたいのですが、もうちょっと後にします。）

（続く）  
水本 清隆

### 〔引用文献〕

中国地方電気事業史 昭和49年、中国電力業務報告書 昭和46年度、平成12年度

太田川漁業協同組合

太田川史 平成5年

建設省太田川工事事務所

戸河内町史 通史編（下） 平成13年

戸河内町

太田川新聞（仮称）発行準備ニュース第8号

平成12年

太田川新聞（仮称）を発行する準備会

# オヤ??ニラミ



## 出島沖産廃処分場問題に思う

先月号でお知らせした広島市出島沖の産廃処分場埋立て問題が、施設許可をめぐって緊急かつ流動的になっていきます。そこで、この間、地元住民の方々と接触してきた「山海草木」士の投稿を紹介します。ゴミ問題は私達一人一人の暮らしのあり方が問われている問題です。多くの方のご意見お待ちしています。

### これは地元だけの問題ではない

出島沖埋立地区の第5工区の1画18haを、県が事業主体として産廃処分場にしようとする計画が着々と進行している。この計画の最大の問題は、その事業内容と共に、その内容が公開されるまでのプロセスにある。99年3月には、県はすでにそれまでの計画を改訂して産廃処分場として位置付けていたにもかかわらず、地元住民に説明会が実施されたのは、今年(01

年)の2月である。2年間ものあいだ事業主体である県が、地元住民に何の説明もなかったというのは、情報公開レベルが全国的にも低水準という県の体質が表われただけでは済まされない問題ではないか。また、この事は広島市民、否、事業主が県であるのだから県民全体の問題である。

### 6つの責任を明確・対等に

ゴミ問題には私は常々6つの責任があると考えている。製造責任、流通責任、販売責任、生活(消費)者責任、処分業者責任、そして行政責任の6つである。この6者の関係は、互いの

情報を公開し、自由闊達な議論を同じテーブルを囲んで積み上げる努力をし、そのような場が何度も設定された時、はじめて対等な関係が保障されるのではないか。しかし、現実には地元住民に説明会がもたれたのは計画されてから2年後であった。これでは住民が主人公の対等な関係どころか、住民無視の行政と言われても仕方があるまい。「住民が主人公」というのは選挙用のお題目であってはならない。

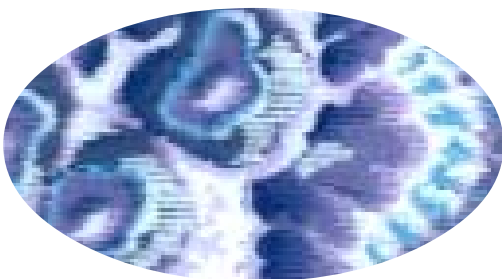
7月30日に開かれた環境影響評価審査会に地元の方と出席してみると、そこは地元住民はオブザーバーとしての参加で発言権はなく、委員同士の質疑を聞くだけの場である。この場が、そのような性格の会議とあらかじめ位置付けられている以上、その事自体は仕方がないとしても、問題は審査会の議論の内容である。それはあたかも産廃処分場にすることを前提にした議論に思えたのは私だけであろうか?

### ゴミ問題の根本的解決へ向けて

ともあれ10月上旬には、県が市に対して求めている施設許可に対する市の答申があると聞く。未来の子供

たちに禍根を残さないためにも、市は明確に産廃埋立て処分場NO!と宣言していただきたい。しかし、この宣言だけでは問題の先送り、根本的な解決にならない事を我々市民も自覚すべきだ。そこで提案したい。先に述べた6者が困めるテーブルを早急に建設することを。

ゴミ問題は、私達一人一人の生活に深く根ざした、極めて緊急を要する課題である。「環・太田川」の読者はもとより、広く世論に訴え、それぞれの地域ごとに「テーブル」作りの作業に取りかかれぬものだろうか。あの美しかった広島海や川や山を取り戻し、未来に手渡すためにも...



# みずべのとしよかん いのちの森

西中国山地  
田中幾太郎 著

(光陽出版社、1995年)



太田川、高津

川、錦川の源、陰陽の分水嶺、西中国山地には、太古の昔からブナを中心にした豊かな森が広がり、そこに生活するすべての生きとし生けるものの働きが、滋養豊かな「生命の水」を「醸造」してきた。

そのことを鋭い感覚と深い知恵でとらえていた私たちの祖先は、標高700メートルを超える「深山(みやま)」には、里の暮らしの守護神が住むとして、ほとんど立ち入ることさえしなかった。ところが、1950年代からの「文明大革命」は先人たちの「不文律」を顧ることなく深山の森をなぎ倒してスギやヒノキの人工林に作り変え、里の暮らしを激変させた。その結果。

本書には、西中国山地の深山や里山に今も暮らす、あるいは絶滅してしまった19種の生き物たちの生き様が描かれている。同時に、「生物共同体」の一員として彼らに深い感謝の気持ちを持ちながら暮らしてきた先人達との関わりを語り、それを壊してしまったこの五十年間の私たちの絶望的ともいえる現実を、深い悲しみと憤りともに見つめている。

「私たちは、ふる里の不条理な異変を少しでもくいとめながら、未来の子供たちがふる里の豊かな自然との交歓を取り戻せるように、『自然なヒト』の努力を再起しなくてはならない。」「本書『おわりに』より」

「いのちの森 西中国山地」は、県立図書館などで借りて読むことができます。書店でも注文可能(本体1554円)。

## 表紙写真

### 『太田川の船大工』

川口九一さんは、1895(明治28)年、当時の下村に生まれ、坪野の船大工に弟子入りし、5年の丁稚奉公と1年のお礼奉公をした後、岡山県の川船・海船の造船技術を習いに出かけ、大正9年に帰って独立。毛木に船小屋(造船所)を建てた。

明治後半期の太田川筋には十二軒の船大工がいて、大船(荷船)の活動は隆盛を極めたが、大正中期以後次第に下火となり、上流から船はなくなっていくた。

戦後はほとんどアユを捕る漁船しかなくなり、川口造船所は毛木から中屋(可部)に移転。太田川最後の造船所として命脈を保ってきた。この写真撮影の26年前はまだ親子での仕事だったが、現在は1932年生まれの悟さんがただ一人、伝統を守る重要文化財的存在として活動している。

### 渡辺泰邦さん、ありがとうございます。

今月号10頁に「太田川の植物 フジバカマ」を執筆して下さった植物研究者の渡辺泰邦さんが、8月29日に65歳で永眠されました。渡辺さんは、出来たてほやほやの海のものとも山のものともつかない本誌に対して、ご闘病中にもかかわらず原稿の執筆を快く引き受けて下さり、本誌の活動をあたたかく見守って下さいました。ほんとうにありがとうございました。

渡辺さんは広島県の生物研究界の発展に尽くされ、広島県に自然史博物館をつくるべく奔走されました。「環・太田川」では、渡辺さんの長年の「悲願の実現に向けて、私たちに何ができるか考えてまいります。

渡辺さんがこの地の植物たちに寄せられた限りない愛情をおしみ、ご冥福をお祈りいたします。

「環・太田川」スタッフ一同

## 編集後記

8月号からの宇品の産廃問題、これは宇品の人だけの問題ではない。何年か後に市民、県民が思い知ることになるのでは。(幸田)

台風が過ぎてちよつとだけ涼しゅうなつたが、昼間はまだまだうだる。それにしても暑いのが長すぎる。今からバテが出るけえ、養生しよう。(哲)

### 「環・太田川」定期購読会員 になりませんか? 一般定期購読会費は、 年間3,000円です。

月刊誌購読のほかイベントや学習会の参加が無料になる賛助会員(年間5,000円)、「環・太田川」の活動をさらに積極的に支援して頂く維持会員(年間10,000円)もごさいます。会費のお振込みは、郵便振替口座 01390-6-20356

「環・太田川」事務局へ  
お問い合わせは 左記「環・太田川」編集会議住所・電話番号へお願い致します。パンフレットを送らせて頂きます。

### 「環・太田川」垂穂号(月刊) 2001.09.10 発行 (第五号)

「環・太田川」編集会議発行  
〒733-0852  
広島市西区鈴が峰町40-8-202  
原 哲之 方  
Tel・Fax 082-278-1044  
HPアドレス:  
[http://hiroshima.cool.ne.jp/kan\\_ootagawa/](http://hiroshima.cool.ne.jp/kan_ootagawa/)

年間購読 3,000円  
一部 300円